

自然庭園の桜咲く(4月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介します。

自然庭園の桜咲く(4月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、冬の寒さから解放され、陰暦でいう卯月(うつき)の名が示すとおり、多くの植物が開花の準備をはじめ、少し浮きたつような春雲気に包まれています。今月は、国花(こっか)とも言われる桜についてお話をさせていただきます。

桜はバラ科に属する樹木で、野生の9種を原種として、変種や園芸種を加えると600種類以上あると言われています。

桜の語源は、桜の古い名前を木花(このはな)と言い、日本神話に木花開耶姫命(このはなの さくやひめの みこと)という美しい女神が、富士の山頂に降りて花の種をまいたため、日本中に桜の花が咲き乱れるようになったとの記載があることから、コノハナノサクヤヒメの「サクヤ」から来たのではないかとされています。

桜は古くから御神木として大事にされ、農業では作柄を決めたり、豊作を占うための花見の対象となってきました。

花見と言えば、昔は山に咲くヤマザクラを見ることでしたが、江戸時代に8代将軍・徳川吉宗による「享保の改革」(きょうほのかいかく)の際、鹿狩場(たかかりば)である飛鳥山(あすかやま)の治安対策や、隅田川堤(すみだづつみ)の土手の強化を目的に、花見が奨励されたことが、現在に続いていると言われています。

寿命は、一般的に寿命が短いとされるエドヒガンとオオシマザクラの雑種であるソメイヨシノでも、青森県弘前公園(ひろさきこうえん)のように100年以上のものがあり、山梨県北巨摩郡武川村(やまなしけんきたこまぐん むかわむら)の山高神代桜(やまたか じんだい さくら)は、2,000年以上とされています。

桜の花びらの数は、基本的には5枚ですが、八重桜のように6枚を超えるものから、石川県金沢市の兼六園菊桜(けんろくえんきくざくら)のように300枚以上のものまであります。

色合いは、大島桜の白色から、ソメイヨシノの薄いピンク色、エドヒガンの濃いピンク色、ウコン桜の黄色、御衣黄(ぎょいこう)の黄緑色まであり、咲く姿も、しだれ桜や豆桜、藤桜などがあり、品種によって多様な色合いや咲き姿を楽しむことができます。

開花の時期も、1月ごろから咲くカンヒザクラや、秋に咲く10月桜、狂い咲きと呼ばれる夏の終わりごろにみられる現象に加え、桜前線と言われる地域による開花時期の差があるため、日本では一年中どこかで花見ができるということになります。

桜は花が散ると、芽吹きを遅らせる休眠物質を葉で作し、花芽(はなめ)にため込みます。この休眠物質は寒くなると少しずつ減っていき、なくなってから暖かくなると、一斉に開花するのだそうです。つまり開花には冬の寒さが必要なわけで、四季のある日本は、桜にとって、とても適した土地なのかもしれません。ちなみに桜の花芽(はなめ)が、開花の準備に入ることを、休んで眠ることを打ち破るという意味で休眠打破(きゅうみんだは)といい、一般的には2月1日に設定されていて、この日から一日の平均気温を足していき、400度になった日が開花予想日になるそうです。

桜の香りに含まれるクマリンという成分は、抑うつ感や不安感をほぐす作用があるため、八重桜の花の塩漬けを、お湯に入れた桜湯として、お祝いの席でふるまわれることがあります。また、桜の樹皮は皮膚病や解熱に、花は喘息などに効果があるとされていて、花粉に含まれるエフェドリンは、喘息や風邪の治療薬として用いられる一方、覚せい剤のアμφエタミンに似た交感神経系への副作用があるそうです。よく、夜桜を見に行くと、桜の木に登って大騒ぎをする人を見かけますが、これもお酒に酔っただけではなく、桜の持つ薬としての力によるものなのかもしれません。

みぬま見聞館の自然庭園では、何種類かの桜を見ることができますが、桜の持つ不思議な力に包まれて日常の緊張から解き放たれる、そんなひと時を楽しむため、アルコール類は抜きで足を運んでみてはいかがでしょうか。



ソメイヨシノの花(薄いピンク色)
自然庭園の桜では遅咲きです



オオカンザクラの花(ピンク色)
卒業シーズンに見頃を迎えます



ウコンザクラの花(黄色)
みぬま見聞館の近くで見られます



ギョイコウの花(黄緑色)
サクラとは思えない色をしていますね



シダレザクラの花
咲く姿に独特の雰囲気があります



サンシュユの花
自然庭園では一番早く咲き始めます



ユキヤナギの花
一つ一つは小さな花です



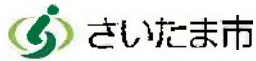
ピンクユキヤナギの花
これも小さな花ですが、縁どりがキレイです



ボケの花
オレンジ色の花と緑の葉のコントラストが素敵です



ヤマブキの花
華やかな黄色が印象的です



[トップページ](#) > [暮らし・手続き](#) > [環境保全](#) > [お知らせ](#) >

ウグイスのさえずり(5月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

[一つ前に見ていたページに戻る](#)

更新日付：2022年4月27日 / ページ番号：C055580

ウグイスのさえずり(5月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

[このページを印刷する](#)

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介します。

ウグイスのさえずり(5月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、新緑が眩しい季節を迎え、野鳥たちも春の花の蜜や虫を求め、忙しく動き回っています。今月は日本に生息し、さえずりが美しいことから、日本三鳴鳥(にほんさんめいちょう)と呼ばれているウグイス、コマドリ、オオルリのうち、ウグイスについてお話をさせていただきます。

ウグイスは、スズメ目ウグイス科に分類される、全長14～16cmほどの小鳥で、葉に付いた虫などを食べ直径200m程の縄張りを持ちます。名前の由来は、一説によるとウグイスの鳴き声が「ウー、グイ」と受け取られ、鳥を意味する接尾語の「ス」が付けられ、「ウー、グイ」と鳴く鳥といわれたとされています。

ウグイスと言えば「ホーホケキョ」という誰もが知る鳴き声があります。その鳴き声を聞けば、春の訪れを感じることから「春告げ鳥」と呼ばれています。

自然庭園では毎年3月になるとウグイスのさえずりが聞こえてきます。

今年も3月初めに聞こえたウグイスのさえずりは、幼鳥なのか「ホーホケキョ」とうまく鳴けず、語尾の「ケキョ」が微妙に濁って聞こえました。次第にうまく鳴けるようになり、「ホーホケキョ」としっかりさえずるようになりました。

その年最初にちゃんと「ホーホケキョ」と鳴けたのを聞いたとき、これを「初鳴き」といいます。桜の開花予想をつないだ線が、桜前線と呼ばれ次第に北上するように、ウグイスの「初鳴き」も記録され、生物季節観測として前線マップが作られています。

このウグイスの鳴き声「ホーホケキョ」ですが、そう鳴くのは繁殖期のオスだけで、多い時には1日に1000回も鳴くことがあるそうです。地鳴きは「チャッチャツ」という舌打ちのような声で鳴き、「笹鳴き」と呼ばれています。

また、警戒した時や縄張りに他のオスが入って来た時は「ケキョケキョ」とけたたましく鳴き、尾羽を上下させ左右に首を振りながら鳴き続けます。これを「谷渡り」といい、自然庭園でもよくこの「谷渡り」の鳴き声を耳にします。

「鶯色」と言うと、ウグイスのきれいな鳴き声や「梅にウグイス」のイメージから、あざやかな緑色が連想されますが、JISの色彩規格に示された「ウグイスいろ」は暗くくすんだ黄緑色となっています。実際に「ウグイス」のカラダの色はこの暗くくすんだ黄緑色で全く目立たないことから、美声でメスに求愛しているのかもしれませんが。

そんなウグイスの姿を写真に収めようとして、よく聞こえる鳴き声を頼りに探すのですが、地味な羽の色で葉の影などに潜り込み姿をあらわさないのが見つけることが難しく、なかなかシャッターチャンスも訪れません。自然庭園にも長く居てもらいたいのですが、春が終わりになるころには姿が見られなくなります。

ぜひこの機会に美しいさえずりを聞きに自然庭園にお越しください。

皆様のご来館、お待ちしております。



ウグイス

可愛らしいですが、地味です



鳴くウグイス

「ホーホケキョ」とうまく鳴けたでしょうか？！



鮮やかな体色のメジロ
ウグイス色はこちらをイメージしてしまいますね



タンポポとモンシロチョウ
この時期、自然庭園の広場を飛び交います

スイカズラの甘い香り(6月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介します。

スイカズラの甘い香り(6月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、しっとりとした空気の中、草木の緑の香りが一段と強くなってきているのを感じることができます。

今月は、自然庭園の入り口案内図に寄り添うように咲いているスイカズラについてお話をさせていただきます。スイカズラは、スイカズラ科に属する常緑つる性木本(もくほん)で、他の植物に巻き付いて成長します。5月から6月に、葉の根元から唇に似た5cm程度の、筒の状態の花と書く筒状花(とうじょうか)を2個づつ並べて咲かせます。花は、ジャスミンに似た甘い香りを漂わせ、秋には5～6ミリメートルほどの黒色の丸い実をつけます。

スイカズラという名前は、昔、子供たちが花の付け根にある蜜を吸って遊んだことから、吸う葛(すうかずら)が由来と言われています。欧米でもスイカズラの近縁種は、蜜を吸うという意味のHoneysuckle(ハニーサックル)と呼ばれているそうです。スイカズラは、漢字では忍ぶ冬と書きますが、これは文字通り冬になっても葉や茎が枯れることなく、寒さに耐え忍んでいるように見えることから言われています。また、スイカズラの別名として、金と銀の花と書き、金銀花(きんぎんか)と呼ばれることもありますが、こちらは、はじめ白い色のスイカズラの花が、数日で黄色に変わり、白色と黄色が入り乱れて咲く様子からきていると言われています。

スイカズラは、葉や茎を乾燥させた物を忍冬(にんどう)、花のつぼみを乾燥したものを金銀花(きんぎんか)と呼び、古くから漢方薬の原料として解熱や化膿性炎症の治療薬に配合されてきました。風邪薬と言えば、日本ではクズの根を主成分とする葛根湯(かっこんとう)が有名ですが、国では、熱が高い場合に向いている薬として知られていて、金銀花(きんぎんか)のほうが、忍冬(にんどう)よりも、より解熱効能に優れているとされているそうです。また香りが良いことから、茎や花をお茶として飲んだり、ホワイトリカーに花を漬けたものが、金銀花酒(きんぎんかしゅ)の名称で売られたりしています。

江戸時代の将軍の中でも長寿と言われ、当時の平均寿命が約50歳なのに対し、75歳まで生きた徳川家康は、スイカズラの花を焼酎やみりんに漬けた忍冬酒(にんどうしゅ)がお気に入りだったそうで、不老長寿の健康薬酒として、静岡県浜松市の名産品として今でも有名だそうです。日本で最古の神社の一つとされ、葉の神様でもあられる大物主大神(おおものぬしのおおかみ)を、お祀(まつ)りする奈良県桜井市(さくらいし)の大神神社(おおみわじんじゃ)では、毎年4月に行われるお祭りの鎮花祭(ちんかさい)で、製薬会社が医薬品を奉納する際、スイカズラと百合根をお供えし、参拝者には三輪山(みわやま)のスイカズラと、狹井神社(さいじんじゃ)の御神水(ごしんすい)で作られた忍冬酒(にんどうしゅ)がふるまわれるそうです。

スイカズラの花言葉には、献身的な愛・友愛などがありますが、これはスイカズラがつるを巻き付けて離れないところや、古くから薬草として利用されてきたことからきていると言われています。また、カナダの小説家であるモンゴメリーの作品の「赤毛のアン」の中では、何度もスイカズラの花が登場し、旅立ちの場面でもスイカズラが花を咲かせている様子が描かれています。ほかにも、サウンドオブミュージックやメーリーポピンズなどの作品の主演として有名な、イギリス出身の女優で歌手・作家・演出家であるジュリー・アンドリュースが執筆した子供向けのファンタジー小説「偉大なワンドゥール最後の一匹」の中では、ワンドゥールという生き物を探す冒険の様々な場面で、大切な場所へ導くためのヒントであったり、勇気や希望を与える重要な役として、スイカズラがその甘い香りとともに描かれています。ちなみに風水学では、スイカズラの花には幸せな恋を引き寄せる効果があり、金銀花の別名から財宝を表わす縁起の良い花と言われています。

梅雨を迎え、なんとなく外出が面倒になり、家にこもりがちなの季節、生き物との素敵な出会いや、ちょっとした裕福感が欲しいなと感じましたら、スイカズラの甘い香りを確かめに、是非みぬま見聞館の自然庭園を訪れてみてはいかがでしょうか。



冬のスイカズラ
葉が丸まっていて寒そうです



スイカズラのつぼみ
何かの角(ツノ)のようです



スイカズラの花
二つ並んで白と白です



スイカズラの花
二つ並んで白と黄色です



スイカズラの花
こちらは黄色と黄色です



スイカズラの花
金銀花に咲く様子です



ヤマホタルブクロの花
木陰などでひっそりと咲いています



ハンゲシヨウ
小さな花のまわりの葉が白くなり、際立たせています



アオモンイトトンボ
おしりのライトブルーがあざやかです



ニホントカゲ
艶やかな体色に魅せられます

コバンソウは美味しそう！？(7月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピック
ス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介します。

コバンソウは美味しそう！？(7月に自然庭園で観察できる動植物について)

小暑（ショウショ）を迎え本格的な暑さが始まる季節となりました。今月は自然庭園の入り口で小判のような実を实らせた、イネ科のコバンソウについてお話をさせていただきます。

コバンソウは小判に似た小穂（ショウスイ）とよばれる実を持ち、その実が小判に似ていることから、この名がついたとされています。原産地はヨーロッパ、北アメリカで明治時代に観賞用として輸入され、野生化したものとされています。実が俵に似ているので、別名「俵麦」とも呼ばれています。

コバンソウより小さい三角形の小穂（ショウスイ）を持つ、ヒメコバンソウという種類もあり、これも帰化植物で日本各地で見られるそうです。

コバンソウの花言葉は「お金持ち」、「金満家」と、何かワクワクさせる印象を与えてくれます。そのほか「心を揺さぶる」など、吹きつける風に絶え間なく揺れ、小穂（ショウスイ）をぶつけ合う姿から連想されたものとされています。

コバンソウは1年草で、5～7月頃に花をつけ、高さ30～60センチメートル程に成長し、全体は無毛、葉の幅1～7ミリメートル、薄く柔らかで細い枝先に垂れ下がるように1～14個の小穂（ショウスイ）をつけます。小穂（ショウスイ）は初め緑色をしていますが、熟すると黄緑色を帯び、さらに次第に色づき夏も遅くなるころには、黄金色に輝きます。この時期には昆虫の卵にも見間違えられる形になります。

コバンソウはイネ科の植物なので、小穂（ショウスイ）を炒めるなどして美味しく食べることもできるそうです。小穂（ショウスイ）から剥がれた種の大きさは2.5ミリメートル程で風に運ばれて飛散していきます。飛散した後は抜け殻になって、振ってみると「カラカラ」と音が出てとても風情を感じることができます。

コバンソウはその個性的な姿から、金運アップの縁起物としてフラワーアレンジメントや生け花の花材にも利用されています。ホームセンターなどで、手軽に種を買うことができます。丈夫な植物なので、育て方も難しくなく、適度な日当たり、水、肥沃（ヒヨク）な土があれば大丈夫です。種まきの時期は9月中旬～11月頃です。

今年は、自然庭園にあるオオムラサキを保護している小屋の前など、たくさんのコバンソウが見られます。同じ場所でも毎年見られるわけではないので、この機会にぜひ観察にお越しください。お待ちしております。



コバンソウ
出来立ての小穂（ショウスイ）です



コバンソウ
いよいよ色濃くなって美味しそうです



オオムラサキの小屋の前のコバンソウ
小判にみえますか！？



ヤマホタルブクロ
この時期、自然庭園のあちこちに咲いています



コシアキトンボのメス
自然庭園を飛び交っています



シオカラトンボのメス
ムギワラトンボとも呼ばれます

秋の七草、ハギ(8月の自然庭園では)～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介いたします。

秋の七草、ハギ(8月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、暦の立秋(りっしゅう・8月7日)を迎えようとしているにもかかわらず、空気が肌にまとわりつくような真夏の暑さが日々続いています。

今月は、秋の七草のひとつにも数えられるハギについてお話をさせていただきます。

ハギは、ヤマハギをはじめとするマメ科ハギ属の総称で、草ではなく落葉低木になります。名前の由来には諸説ありますが、毎年古い株から芽を出すことから、生物の生(せい)に花の芽の芽(め)と書く生芽(ハエキ)が変化したのではないかとされています。垂れるように伸ばした枝に、蝶に似た直径1.0cmから1.5cm程度の赤紫色の花を、夏の盛りの8月から咲かせ始め、9月、秋の初め頃に満開を迎えます。

ちなみに春の七草は、無病息災や健康長寿を願うとともに、お正月のおせち料理を食べすぎて疲れた胃腸を休める意味で食する七草粥の材料でもあるように、食用の植物で構成されています。一方、秋の七草は、どちらかと言えば姿や形を楽しむ植物でまとめられています。

秋の七草の始まりを調べてみると、日本最古の歌集である万葉集に収められている奈良時代初期の貴族・歌人である山上憶良(やまのうえのおくら)が詠んだ2首の歌に由来しているそうです。

一つは、巻八 1537番の「秋の野に 咲たる花を 指折り かき数ふれば 七種(ななくさ)の花」(あきののに さきたるはなを およびをり かきかぞふれば ななくさのはな)という歌で、

もう一つは巻八 1538番の「萩の花 尾花葛花 瞿麦(なでしこ)の花 姫部志(をみなえし) また藤袴 朝顔の花」(はぎのはな をばなくずはな なでしこのはな をみなへし またふぢばかま あさがほのはな)という歌になります。

意味としては、2首でワンセットとなり、秋の野に咲く美しい花を指折り数えると、ハギ・ススキ(オバナ)・クズ・ナデシコ・オミナオシ・フジバカマ・キキョウ(アサガオ)の七種類であろうといった意味になるのでしょうか。

また、ハギは万葉集の中で最も題材として詠まれた植物でもあり、140首も詠われているそうです。確かにハギの花が満開になると、花の重さで首を垂れるかのように枝がたわんで見え、風に吹かれそよ姿は、とても風情が感じられます。

ハギの花言葉、内気・思案・柔軟な精神は、そんな少し寂しげで控えめな姿からきているのかもしれませんが。

他にもハギには残酷などというちょっと怖い花言葉もありますが、こちらは花が終わりに近づくと、風に吹かれるだけでポロポロと散って落ちてしまうことからきているのだそうです。

また、十五夜として知られる中秋の名月の日には、ハギとススキをお酒やお団子などと共に、月の下に供える風習があります。これはハギに、邪気を払う力があり、神様がお供え物をいただくためのお箸という意味があるからだそうです。実際、古来の宮中では萩の枝で作った箸を使っていて、1800年代にはハギの箸で月見饅頭に穴をあけ、その穴から月を眺める「月見の儀」という行事が、女子の元服の儀式として行われていたそうです。

日本では、自生するハギの種類として十数種が確認されているそうですが、最も多く栽培されているのが、宮城県の宮城野地区に多く自生していることから名づけられたミヤギノハギで、宮城県の県の花として、県のシンボルマーク、「県章」としてデザインされています。

また、松尾芭蕉の奥の細道にうたわれている「夏草や 兵どもが 夢の跡」(なつくさや つわものどもが ゆめのあと)の風景地でもある岩手県平泉市の毛越寺で、9月に開催される萩祭りでは、ミヤギノハギとその変種のシロバナハギ、そしてヤマハギの3種類、計500株が境内にいろどりを添えるのだそうです。

宮城県のお土産としても有名な銘菓「萩の月」の名前にもハギは使われています。

ちなみに、山口県萩市の地名は、近くにハギがたくさん生い茂った山があったことに由来していると言われていて、市の花はハギとツバキだそうです。

みぬま見聞館の自然庭園では、ヤマハギやヌスビトハギ、ちょっと生えてしまっは困る北米原産の帰化植物であるアレチヌスビトハギなどが花を咲かせます。

まだまだ暑い日が続く、外出することさえ面倒になりがちなこの季節、流れる水のせせらぎ、ささやきかけるような葉の擦りあう音、樹木の濃い緑の隙間からこぼれる木漏れ日などに包まれ、周りの暑さから解放されたみぬま見聞館の自然庭園で、ひっそりとはかなげに咲く可憐なハギの花を見つけに、是非訪れてみてはいかがでしょうか。





ヤマハギ



ヤマハギの花



ヌスビトハギ



ヌスビトハギの花



アレチヌスビトハギ



アレチヌスビトハギの花



ルリタテハ



ヒカゲチョウ



カブトムシ



ヒラタクワガタ

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介します。

がんばれ、カブトムシ！（9月に自然庭園で観察できる動植物について）

残暑厳しい毎日ですが、今月は夏の昆虫の王様カブトムシについてお話しをさせていただきます。

カブトムシはクワガタと人気を二分する昆虫ですが、自然庭園では今年もブナ科のクスギやコナラの樹液を求め、クワガタやスズメバチと競いあいながら、懸命に命をつなごうとしています。

カブトムシ(和名)の由来は、頭部に発達した大きなツノを持つため、日本の戦国武将の兜のように見える様子から、ついとされています。カブトムシのツノの力はたいへん強く、カブトムシ同士がえさ場などで戦うとき、ツノで相手を撃退します。繁殖のためメスを獲得するときも、ツノを使って相手を木から落としてしまう力強さも持っています。

幼少期に成虫のカブトムシを飼育された方も多いと思いますが、飼うことはさほど難しくなく、飼育ケースに腐葉土を入れいつもきれいにしておき、朽ち木を入れて昆虫ゼリーを与えておけば成長を見とどけることができます。

日本では本州・四国・九州に生息し、標高1500メートル以下の山地から平地の広葉樹林に生息しています。カブトムシの体長は、オスは角を含め8センチメートル程、メスは5センチメートル程と、日本では最大級の昆虫になります。

基本的に夜行性で、昼間は樹木の根元や腐葉土などの下で休んでいて、夕暮れとともに活動を始めますが、ときに食欲旺盛なカブトムシは昼間でも樹液を求めめることもあるそうです。

夏場に見られる昆虫のほとんどは、卵から孵化して幼虫となり、蛹化して蛹になり、羽化して成虫となる完全変態の生長をとりまします。

セミは土の中で5～6年幼虫として過ごしますが、カブトムシの幼虫は脱皮を繰り返し、1年越冬したのちに蛹となり羽化して成虫となります。

成虫の寿命もとても短く、自然界においては1ヶ月程で、他の昆虫などと比較しても短い命となります。

カブトムシは、生育の過程で食べ物が変わり、卵から幼虫になると腐葉土を食べ、2度の脱皮を繰り返し3齢幼虫となる頃には10センチメートル程に成長します。この3齢幼虫のお腹を見て、黒いV字のマークが入っていればオスで、入っていなければメスと、オスメスの識別ができます。蛹の時期はなに食わず、羽化して成虫となる時期を待ちます。成虫はご存知のとおり、木の樹液をすすります。

またカブトムシの成虫は、口ではなく前胸と腹部の各節の両側にある「気門」と呼ばれているところから、空気を吸い込んで気管に送り呼吸をしています。

カブトムシは残念なことに天敵も多く、幼虫期にはモグラやヘビに食べられ、羽化した成虫はカラスやタヌキなどに襲われます。

自然庭園でもカラスに襲われたカブトムシを多く見かけます。そのほか人間の開発による森林伐採や、昆虫採集の対象として捕獲されている状況を考えると、最大の天敵は人間かもしれません。

今年の夏の猛暑の中、自然庭園の生き物たちも生き延びるため、鳥たちは口を開けたまま羽ばたいて、昆虫たちは羽をひろげて体温調節をするなど、たいへんな様子がみうけられました。カブトムシなど短い命の昆虫たちを大事に見守っていただけたら幸いです。

残暑も厳しそうです。暑さ対策をして、自然庭園へお越し下さい。



カブトムシ

昼間なのに食事中のようです



クワガタ

カブトムシと人気を分け合う夏の昆虫です



カブトムシの幼虫
新しい腐葉土を入れると素早く潜っていきます



カブトムシのサナギ
見づらいですがそれなりのカタチになっています



カブトムシのオスとメス
ここで出会ったのでしょうか？



食事中的カブトムシ
昆虫ゼリーは美味しいようです



オオカマキリ
立派な翅をもった成虫です



ハラビロカマキリの食事
大きなアブラゼミを捕まえました



シオカラトンボ
街中에서도見かけることがあります



ナツアカネ
いわゆる「赤とんぼ」です

蕎麦に似たタデ科の「ミゾソバ」(10月の自然庭園では)～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介いたします。

蕎麦に似たタデ科の「ミゾソバ」(10月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、旧暦の仲秋(ちゅうしゅう)を迎え、庭園内の木々の隙間を秋風が吹き抜けるようになってきました。今月は自然庭園で可憐な花を咲かせるミゾソバについて、お話をさせていただきます。

10月になると、市内のお蕎麦屋でも、新そばの看板やのぼりを見かけるようになりますが、ミゾソバもソバ(蕎麦)と同じ、タデ科に分類される一年草で、北海道から九州までの湿地帯に分布しています。名前の由来は、溝や湿地に生え、ソバに似た黒い実をつけることからと言われていて、昔は飢饉の時などの非常食である救荒食物(きゅうこうしょくもつ)として、「蕎麦がき」のようにして食べられていたそうです。

ミゾソバは、晩夏から秋の8～10月頃、白色～ピンク色の花を咲かせますが、この小さな花の集合花が、お菓子のこんぺい糖に見えることからコンペイトウグサと呼ばれたり、葉が牛の顔にも見えることから「牛の顔」(ウシノヒタイ)と呼ばれたりもしています。ミゾソバの花をよく見てみると、茎にすきまなく集まったつぼみが順番に開いていくのですが、咲く前のつぼみも開いた花も終わった花も枯れることなくピンク色で、遠くからは一つの花のように目立って見えます。これは、花粉を媒介させる多くの昆虫を呼び寄せるため、長い期間花が咲いているように見せているのだそうです。

また、ミゾソバには、茎や葉、花の軸に下向きのトゲがあります。これは自分の身を守るだけではなく、お互いに支え合ったり、他の植物等に絡みついたりして、地上高く伸びて目立つことで虫たちにアピールする効果があると言われてしています。

さらにミゾソバには、ほかの植物には見られない特徴があります。通常、植物は、開放花(かいほうか)と呼ばれる花を咲かせ、虫に花粉を運んでもらうことで受粉し種子をつくりますが、ミゾソバは自分だけで受粉できる閉鎖花(へいさか)という花も咲かせることができるのだそうです。これは、開放花でできた種子が、水鳥などに食べられることで、別の土地で新たに芽を出すだけでなく、自家受粉でできた種子は親の遺伝子を強く引き継ぐため、親が育った土地の環境が変わらなければ確実に繁殖できるので、同じ土地で確実に子孫を残すことができるのだそうです。

実際にミゾソバはたくましい野草としても知られていますが、「蓼食う虫も好き好き(たでくうむしもすきずき)」ということわざが示すように、タデサルゾウムシやタデノクブトサルゾウムシのように好んで葉を食べてしまう虫もいます。

また、ミゾソバは、乾燥した葉を煎じたものがリュウマチに、茎には止血作用や鎮痛作用の効果があるとされていました。なかでも、新選組で「鬼の副長」と恐れられた土方歳三の実家に代々伝わる「石田散薬(いしださんやく)」という薬は、打ち身や骨折によく効くとされており、原材料である「牛蒡草(ぎゅうがくそう)」と呼ばれていたミゾソバの葉や茎を刈り取る際、幼き日の土方歳三が、雇われた人々に的確な指示を出していたとか、行商をして売りさばっていたとか、新選組の常備薬とされていたなどの逸話が残っているそうです。

ミゾソバの学名*Persicaria thunbergii*(ベルシカリアトウンベルギー)は、ドイツの医師・博物学者で、江戸時代の出島の3学者の1人である(フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・)シーボルトが名づけたそうです。ちなみに、花言葉には「純情」と「風変り」がありますが、「純情」は、白い花卉の先がほんのりと紅色をしている様子が、恥じらって頬を赤く染めた少女を連想させることから、「風変り」は、ガクが花卉のように見える花や、牛の顔に似ている葉、三角錐状のつぼみなど、変わった見た目からきているのだそうです。

タデ科には、他にもママコノシリヌグイやアキノウナギツカミといった、ミゾソバによく似た花を咲かせる不思議な名前の植物があります。こちらは、またの機会にお話ができたらと思いますが、そんなミゾソバの花を見つけに、うだるような暑さも無くなり、多くの植物が秋の装いをまといはじめた「みぬま見聞館」の自然庭園を、是非訪れてみてはいかがでしょうか。



ミゾソバ
蕎麦に似たタデ科の植物です



ミゾソバの花
「コンペイトウグサ」とも呼ばれます



ミゾソバの茎のトゲ
いろいろな役割があるようです



ハナトラノオの花
これからの時期に咲く花です



ホトギスの花
もうすぐ咲きそうです



ゲンショウコの花
これから見られるかもしれません



秋の自然庭園
これから少しずつ色づきます



色づく自然庭園
モミジやメグスリノキの紅葉がキレイです



モズ
高鳴きを聞くようになりました



エナガ
とても可愛い姿です



ジョウビタキのオス
みぬま見聞館の建物付近に現れます



ジョウビタキのメス
地味な色合いですが愛嬌のある表情です

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介をします。

アカハラの落ち葉返し（11月に自然庭園で観察できる動植物について）

秋も深まりつつある今月は、野鳥のアカハラについてお話させていただきます。
名前の通り胸とお腹が見ると赤に見えるような、濃いオレンジ色の羽を持つ綺麗な野鳥で自然庭園にも毎年のように渡って来ます。

アカハラは、スズメ目ヒタキ科に分類される漂鳥で本州中部以北の山地の明るい林で繁殖し、秋冬には暖地の公園や林で木の実や昆虫、ミミズなどを餌としています。ちなみに漂鳥とは、暑さ寒さを避けて、山地や平地を行き来する鳥のことです。

アカハラの体長はツグミやムクドリとほぼ同じ24センチメートルほどあるので、比較的に見つけやすいのですが、警戒心が強く、そっと近づかないとすぐに飛び立ってしまいます。

オスとメスで羽の色が異なり、オスの頭部は黒味のある茶色で、背や翼は灰色かかった茶色、胸と脇はオレンジ色がかった赤色で、お腹の中央は白い羽を持っています。メスは頭部の黒色味が無く喉に白い縦斑があり、微かに眉斑を持つものもあり、胸から腹の赤色は少し淡い色になっています。

鳴き声は「キョロン、キョロン、チリリリ」と可愛らしいさえずりをし、地鳴きは「ツイー」と鈍い声で鳴きます。繁殖期は3～8月で、オスが直径300メートル以上の縄張りをつくり、後からメスが来て、つがいとなります。巣は2メートル位の低い位置に造られることが多く、卵を3～5個産卵し2週間程で孵化（ふか）し、その後2週間位で巣立ちを向かえます。しかし巣が低い位置にあるためか、天敵のヘビなどに襲われてしまうことが多く、自然界の厳しさを感じさせられます。天敵から逃れるためにも早く成鳥となり1日でも永く生き延びてもらいたいですね。

アカハラは餌を探す時に、落ち葉に頭を入れて葉をひっくり返す「落ち葉返し」というユニークな方法で、昆虫や木の実などを獲ています。

アカハラが繁殖期に生息している富士山麓や奥日光などの地域では、生息数が年々減少しているとの報告もあり大切に見守っていききたいものですね。

ところで、みなさんは「SDGs」をご存知ですか。「SDGs」は「Sustainable Development Goals(サステイナブル デベロップメント ゴールズ)」といい、誰一人取り残さない持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標のことで、2030年までに達成すべき17の目標で構成されています。その中の15番に「陸の豊かさを守ろう」という目標があります。

アカハラだけでなく様々な野鳥が生息するための環境について、私達はもっと考えていかなければなりません。

これから冬を迎えるにつれて、枯れ葉が落ち、自然庭園も見通しがよくなります。そこへ、たくさんの野鳥が渡って来るので、野鳥観察には最適な季節となります。バードウォッチングや野鳥の写真撮影にチャレンジしてはいかがでしょうか。

アカハラも自然庭園の中程の橋付近でよく見かけるので、探してみてください。



アカハラ

お腹の濃いオレンジ色が鮮やかです



アカハラ

自然庭園を毎年のように訪れます



アカハラ

寒いのか丸まっていた可愛らしい姿です



イロハモミジ

もうすぐ紅葉すると、とても綺麗です



オカヨシガモ
間もなく渡ってくると芝川などで見られます



モズ
木立てっぺんにとまり、高鳴き中です



コガモ
毎年、真っ先に渡ってくる冬鳥です



シメ
小さいけど恰幅の良い鳥です

名前の由来は「ただなんとなく『ヤツデ』」(12月の自然庭園では)～みぬま 見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介します。

名前の由来は「ただなんとなく『ヤツデ』」(12月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では師走を迎え、冬の陽だまりがことのほか暖かく感じられるようになってきました。今月は冬になり、花々のいろどりが少なくなってきた自然庭園で、白くまとまって花を咲かせているヤツデについてお話をさせていただきます。

ヤツデはウコギ科に属する常緑低木で、7列から11列に裂けたその大きな葉は、天狗の葉団扇(はうちわ)とも呼ばれ、庭木(にわき)としても比較的多く見かける植物です。花言葉は、「分別」「親しみ」「健康」で、日陰でもよく育つため、昔はトイレの目隠しとしてよく植えられていたようです。

ヤツデの名前は、漢字で数字の八とカタカナのツ、手のひらの手と書くのですが、「八つ手」といいながら、実際は7つか9つと奇数に分かれているものがほとんどです。名前の由来については、日本の植物学の父といわれている、牧野富太郎(まきのとみたろう)博士も、「ただなんとなく、その分裂した葉を眺めてつけた名前であって、手の形に多く切れ込むので数多いことを八で表現したもの」と述べています。また日本では古来より「八」は末広がりで縁起の良い数字であったからかもしれません。

日本人がヤツデを身近に感じるようになったのは江戸時代後半と言われ、本草学者で儒学者の貝原益軒(かいばらえきけん)は、著書『大和本草』(やまとほんぞう)の中で、「黒き実なる毒ありと言う。輕のさしみをヤツデの葉に盛りて、食すれば死すと俗に言う。」と記載しています。

実際、ヤツデの葉や莖、根には「ヤツデサポニン」という毒が含まれていて、誤って口にしてしまうと、腹痛や下痢、嘔吐などを引き起こしてしまう可能性があり、昔は汲み取り便所の蛆殺しや虫よけのほか、葉をすりつぶして川に投げ入れて魚を捕まえるためなどに用いられていたそうです。

一方、ヤツデの葉には、「ベータアファトシン」「サポニン・アルファアファトシン」と呼ばれる薬用成分も含まれていて、八角金盤(ハッカクキンバン)という咳止め・去痰の薬に利用されることもあるそうです。

ところでヤツデは、なぜほかの花が咲かないようなこの時期に花を付けるのか、調べてみると、ちょっとおもしろい記述を見つけました。

ヤツデは、昆虫に蜜を供給して受粉する虫媒花であることが知られています。もちろんこの時期に活動する虫は、とても少ないのですが、他に花を咲かせている植物がないので、ヤツデはその虫たちを独占できるわけで、ヤツデが寒い時期に咲くのは、したたかな繁殖のための戦略なのだそうです。

また、ヤツデのように小さな花の集まりである花序(かじょ)が、花軸の先端に向かって細くなっていく様子を円錐花序と呼ぶのですが、ヤツデの場合、この花の集まりの中で、一つ一つの花のおしべとめしべの成熟する時期がずれるのだそうです。

まず、雄性期(ゆうせいき)と呼ばれる、おしべが成熟して花粉を出し、花粉を運んでもらう虫を呼ぶために蜜も出す時期があり、次に雌性期(しせいき)と呼ばれる、めしべが成熟し、ふたたび蜜を出して虫を呼び、花粉を付けてもらう時期を迎えるのですが、これは近親交配をするとう質の劣る子孫ができる可能性が高くなるため、同じ花の花粉がめしべに着くことを避けるための工夫なのだそうです。

ヤツデを詠った歌には、島木赤彦の「窓の外に白き八つ手の花咲きて ころろ寂しき 冬は来にけり」や北原白秋の「花かとも おどろきて見しよく見れば 白き八つ手の かへし陽(び)にして」など、少しもの悲しい歌が多いのですが、一見いろどりをなくすこの時期でも、したたかに、そしてひっそりと日陰で花を付けるヤツデを眺めに「みぬま見聞館」の自然庭園を、是非訪れてみてはいかがでしょうか。

もしかしたらヤツデの隣では、鮮やかな黄色を纏ったツツブキの花も咲いているかもしれません。



ヤツデの葉
いくつに分かれて見えますか



ヤツデのつぼみ
なかなか見たことないですよ



ヤツデの花

冬に咲く花は生きものにとっても貴重です



ヤツデの花

近くで見るとなかなか可愛らしいです



ヤツデの花

冬の貴重は花の蜜に昆虫が惹かれています



ヤツデの実

なんとなく見たことがあるような気がします



ツバキの花が、自然庭園のヤツデの下に
ひっそりと咲いているかもしれません



アオサギ

みぬま見聞館脇の芝川でその姿をよく見ます



ダイサギ

アオサギと同じく大きく羽ばたく姿は雄大です



オオバン

毎年、自然庭園からその姿を見ることができます



ハンシロガモ

名前通りクチバシが広がっていて判別しやすいです



カルガモ

子育てする様子が、時に話題になりますね



オナガガモ
尾が長く優雅な毛並みをしています



ヒドリガモ
自然庭園から見られる常連の冬鳥です

木つつくコゲラ (1月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介いたします。

木つつくコゲラ(1月に自然庭園で観察できる動植物について)

1年で一番寒いころとされている季節を前に自然庭園では、枯れ葉が落ちた木々にたくさんの野鳥たちが集まってきています。のんびりとした印象もありますが、この時期は餌が少ない時期でもあるので、野生動物は生き延びるため必死です。

今月は、身近な野鳥でキツツキ科のコゲラについてお話をさせていただきます。

コゲラは、日本で最小のキツツキの仲間で、スズメほどの大きさながら、木をつついて巣作りを行うほか、木の中にある虫を探して捕食をしています。コゲラは巣作りや食事以外に、「ドラミング」という木を素早くつつく行動をとります。この「ドラミング」は縄張りをアピールしたり、求愛をするなど、コミュニケーションを図るために行っているようです。

コゲラが木をつつくときに白目を剥いているように見えることがあります。これは「瞬膜」と呼ばれる眼を保護するための膜を下ろし、「ドラミング」によって飛び散る木の殻から眼を守っていると考えられています。求愛の「ドラミング」は早春から秋にかけて行われるようです。その中でめでたくツガイとなったコゲラは、協力して巣作りをします。時期は3月～7月頃、主に枯れた枝部分にオスがつついて穴を掘り、仕上げをメスがつついて穴を掘りすすめます。巣穴は直径約3cm、深さ15cmほどで、12日前後で作り上げてしまいます。そこに4～5個の卵を産み、卵を抱いておよそ14日かえり、生まれた雛はたった20日程で巣立ちをして、自分の縄張りを探すようになります。あつという間の子育てですね。

コゲラは山地の林だけでなく市街地の公園でも木のあるところに広く生息しています。最近では都市部でも再開発などで公園が整備され、コゲラの生育環境が広がり、個体数が増えてきているとの報告もあります。

自然庭園でも、コゲラが確認されるのは、数年前は1週間に数える程でしたが、最近では毎日2～3羽観察されています。

コゲラは背面が白と黒のボーダーになっていて見分けやすく、また「ギー、ギー」と独特の鳴き方でコゲラがいるとすぐ分かり、そして木をつつきながら螺旋状に登って行く様子も特徴的で、探しやすい鳥かもしれません。

ただコゲラはオス・メスの識別が難しく、唯一オスは目の後ろに少し赤色の羽を持っているので、その羽で見分けます。なかなか見せてくれないので、私たちも確認できないことがほとんどです。普段は隠れている羽なので、風が吹いたときや興奮状態のときに見えるので探してみてください。

コゲラは、あまり警戒心は強くないので、バードウォッチングや写真撮影に適した野鳥ですが、野生の生きものなので、脅かさないよう注意して観察してください。またコゲラは、シジュウカラの群れに交じり行動をする「混群」という習性も持っています。コゲラやシジュウカラ、メジロ、エナガといった小さな鳥たちの「混群」を自然庭園でもよく観察されます。もしかすると天敵から身を守る手段かもしれません。

この時期、ジョウビタキやアカハラ、カワセミなど綺麗な羽を持つ鳥たちも自然庭園に飛来します。双眼鏡の貸し出しも行っていきますので、寒さ対策をして、ぜひ自然庭園にお越し下さい。



コゲラ
スズメほどの大きさです



木をつつくコゲラ
背中の白黒ボーダーは見分けやすいです



シジュウカラ
胸のネクタイが印象的です



メジロ
混群のなかでも目立ちます



エナガ
なかなかじっとしてくれません



ジョウビタキ
鮮やかな色が目を引きます



アカハラ
今年も自然庭園でよく見かけます



カワセミ
出会えると嬉しい気持ちになります



ヨシガモ
今年も自然庭園付近の芝川にきています



ツグミ
今年も自然庭園ではまだ見かけていません

春の訪れを感じる「フキノトウ」（2月の自然庭園では [このページを印刷する](#) 館 トピックス～

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介をします。

春の訪れを感じる「フキノトウ」（2月に自然庭園で観察できる動植物について）

みぬま見聞館の自然庭園では、春の寒さと書く春寒(しゅんかん)のことばのとおり、立春(2月4日)を過ぎてもなお寒さがぶり返す時期を迎えようとしています。今月は、そんな春間近の庭園の片隅で、かわいらしい芽を出し始めるフキについて、お話をさせていただきます。

フキは、キク科フキ属の多年草で、数少ない日本原産の野菜のひとつとして平安時代から食されていたそうです。フキの名前の由来には、冬に黄色い花が咲くことから冬の黄色と書くフユキが略されたものとか、お尻を拭く紙の代わりとしたことから窓ふきの拭きを語源とするとか、風に吹くと書く「風吹(フフキ)」からなど諸説あります。

フキは地下茎(チカケイ)と呼ばれる地下に伸びる茎により広がる植物ですが、私たちが煮物や炒め物として食している部分は、実は茎ではなく、葉柄(ようへい)と呼ばれる茎につながる柄(え)の部分で、山菜としてよく食されるフキノトウは、花芽(はなめ)と呼ばれるつぼみの部分になります。食用として栽培されているフキは、愛知早生(あいちわせ)と呼ばれる品種が、日本で流通しているフキの7割を占めていて、名前が示す通り愛知県が全国の出荷量の約4割を占めているそうです。フキは独特のシャキシャキとした歯触りや、鼻に抜ける香り、食欲をそそるほろ苦さから、春の訪れを感じさせてくれる食材ですが、ピロリジジンアルカロイド類という天然の毒を含んでいることが知られています。この成分は、動物や昆虫から若葉や実などを食べられないようにするためのものなのですが、水に溶ける性質を持つことから、適切にアク抜きをすることで安全に食べることができるのだそうです。

また、ピロリジジンアルカロイド類は、アニメで有名な「鬼滅の刃」の胡蝶しのぶのモチーフとなったと言われているアサギマダラという蝶の雄が、敵から身を守るためにヒヨドリバナやフジバカマなどの花から摂取しているものと同じ種類のものだそうです。

ちなみにフキは、雄株(おかぶ)と雌株(めかぶ)を持つ雌雄異株(しゅういかぶ)で、これは雄株と雌株を分けることで自家受粉を避けるためと言われていますが、フキノトウは、雌株の方が雄株より苦みが少なくおいしいそうです。

最期に、百人一首の15番の歌を紹介したいと思います。

源氏物語の光源氏のモデルの一人で、料理が趣味であったと言われている平安時代前期の光孝天皇(こうこうてんのう)が詠われた、「君がため 春の野に出でて 若菜(わかな)つむ わが衣手(ころもで)に 雪は降りつつ」という歌で、意味としては、『長生きしてほしい大切なあなたにさしあげようと、春の野原に出かけて若菜を摘んでいると、私の着物の袖に、しんと雪が舞い降りてきます』とでもなるのでしょうか。

容姿やふるまいが美しく、聡明で、温和な性格であったと言われるお人柄があらわれているロマンティックな歌ではないでしょうか。

「若菜」は、フキなどの春に生えてくる食用や薬用になる草のことですが、この若菜摘みが春の七草の始まりともいわれています。

自然庭園は、ビオトープのためフキを含め、生き物の採取をすることはできませんが、一足早い暖かな春の訪れを感じたいときは、木陰でひっそり芽を出し始めたフキに会いに、みぬま見聞館の自然庭園を訪れてみてはいかがでしょうか。



フキ
収穫したくなります



フキノトウ
美味しそうに見えてしまいます



フキノトウの雄株
雄株と雌株で違いがあります



フキノトウの雌株
もう食べられないなと思ってしまいます



マガモ
派手な模様のカモはオスです



ヨシガモ
頭部に光が当たると鮮やかな緑や紫が見られます



ヒドリガモ

今年も自然庭園脇の芝川で見られます



バン

陸に上がると蛍光の黄緑色の足が特徴的です



カイツブリ

潜水が得意ですぐ潜ってしまいます



アオサギ

今年は自然庭園脇の芝川でよく見かけます



モズ

なるべく高いところにとまろうとします



メジロ

目のまわりの白色が際立っています



エナガ

可愛らしいのですがすばしっこいです



シジュウカラ

胸のネクタイ模様と背中の緑色がキレイです

ウグイス、神楽舞う木「ウグイスカグラ」 (3月の自然 [このページを印刷する](#) [み](#) ぬま見聞館トピックス～

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介をします。

ウグイス、神楽舞う木「ウグイスカグラ」(3月に自然庭園で観察できる動植物について)

日差しが暖かくなり、ようやく冬の出口を迎えた今回は、釣鐘のような綺麗な花を咲かせる「ウグイスカグラ」についてお話しをさせていただきます。

「ウグイスカグラ」はスイカズラ科に分類され北海道、本州、四国に自生する落葉性の2mほどの低木で、小枝やひこばえをたくさん生やし、葉も早春の開花とともに芽吹いて成長し、密生します。雑木林などの林床でよく見ることができます。

名前の由来は、「ウグイスカグラ」の花が咲く3月の初めころ、時を同じくしてさえずりはじめるウグイスがこの木に隠れる様子の「ウグイスガクレ」が「ウグイスカグラ」になったという説や、この木をウグイスが渡り歩く様を「神楽舞う」としたことなど、諸説あるようです。別の名も「ウグイスノキ」といわれ、ウグイスとよほど縁があるようで、春の訪れを感じさせます。

花言葉も「未来を見つめる」、「明日への希望」と、何か前向きで、ポジティブさを想起させられます。

ウグイスカグラの開花は3月から4月頃で、枝先にある葉の脇からのびた細い柄に、少しくすんだピンク色でラッパ型の花が一輪ずつ下がり、先端が5つに分かれて下向きのまま開花が進み、平らに開くと、5本ある黄色の雄しべが目立つようになります。初夏には赤く熟す直径1センチメートル程のグミのような実がなり甘みがあって生食が可能です。

ウグイスカグラの品種で紫色の実がなる「クロノミウグイスカグラ」は、「ハスカップ」として知られる北海道の名産品です。何だか美味しそうです。

ただウグイスカグラによく似ている「キンギンボク」という木は2つ並んだ赤い実がなりますが、毒があるため食用にならず、「ヨメゴロシ」という別名がつけられたものもあるので、気を付けなければなりません。

自然庭園では、東屋の東奥、芝川沿いの方で見ることができます。自然庭園に毎年訪れてさえずるウグイスとウグイスカグラの花がこれからしばらくの間、楽しめることでしょう。

この時期、ウグイスカグラだけでなく、サンシュユやボケ、そしてサクラなど次々に開花し、新緑が芽吹く様子を感じてみてはいかがでしょうか。

ぜひ自然庭園にお越し下さい。



ウグイスカグラの花
可愛らしい花です



ウグイスカグラ
自然庭園の木々の間で静かに花を咲かせま
す



ウグイス
その姿はなかなか見せてくれません



鳴くウグイス
鳴き声は春を告げているようです



サンシュユ
自然庭園では開花の早い花の1つです



アンギョウザクラ
早咲きのサクラが一足先に楽しませてくれ
ます



サクラとヒヨドリ
まだ野鳥も多く見られることでしょう



コガモ
旅立ちの 때가近いので今のうちに鑑賞しま
しょう

お知らせ